

19～20世紀の南新疆に関わるウイグル族の 歴史歌謡について

新 免 康*

Historical Folk Songs of the Uyghurs Related to Southern Xinjiang in the 19th and 20th Centuries

SHINMEN Yasushi

In this paper, I discuss the historical folk songs of the Uyghurs in the Xinjiang Uyghur Autonomous Region, China, examining their positioning in the social and cultural context in the era of the People's Republic of China. In particular, I clarify the contents of folk songs touching on historical events that actually took place in southern Xinjiang from the nineteenth to the first half of the twentieth century, as well as historical figures who were active during that time; I also study how these contents have been interpreted and given meaning. Building on this, I analyze the contents of historical songs recorded in the Qing period having themes similar to those published in the PRC era, comparing and contrasting them to examine how they have been interpreted and evaluated. As a result, I find that the descriptions on the historical folk songs in the PRC era, despite greater regulation determined by the political and social conditions peculiar to the PRC state, have been strongly influenced by activities related to the Uyghurs' own ethnic history and culture, as realized after China's economic reform.

キーワード：新疆, ウイグル族, 民謡歌謡, タシュ・アホン

Key Words: Xinjiang, Uyghur, folk song, Tash Axun

はじめに

多民族国家と定義づけられた中華人民共和国においては、各少数民族自治地域における少数民族の言語・文化の尊重が謳われ、民謡歌謡を含む各少数民族の民間文学もその一環

* 中央大学政策文化総合研究所研究員, 中央大学文学部教授

Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University; Professor, Faculty of Letters, Chuo University

として出版活動や文化遺産としての登録事業などが進められてきた。その中で、中国西北部に位置する新疆ウイグル自治区の主要な民族の一つであるウイグル族の民謡¹⁾は、注目すべき特徴を具えている。

タリム盆地周縁オアシス地域を主な居住地域とするウイグル族は、テュルク系言語のウイグル語を使用し、文字文化をはじめとする独自の文化を育んできた。民族音楽として 12 ムカムという伝統的な古典音楽が著名であるほか、口承文芸・民間音楽の面でもウイグル語による民謡、物語詩、冗談話など多様なジャンルのものが豊富に存在している。とくに民謡は中華人民共和国時代においてもウイグル族社会の各地域でさまざまな形で広く歌われてきた。歌詞の内容面から見たその種類は、恋愛歌謡、労働歌謡、生活歌謡など、他の民族の歌謡と共通のテーマ性をもつ歌謡のほか、具体的な実在の歴史上の人物や歴史的状況に関わる歌謡が一定の割合で存在する²⁾点に顕著な特徴があり、非歴史性に彩られた他の一部の民族の民謡と一線を画する点であろうと思われる。これらのウイグル歴史歌謡が、現代中国に特有な政策とそれにとまなう社会・文化状況の中で、どのように位置づけられているのかという点は、現代中国における少数民族の歴史の扱いをめぐる問題性を含み、大変興味深い話題を提供する。

そこで本稿では、中国の新疆ウイグル地域におけるウイグル族の民謡、とくに歴史歌謡をとりあげ、それらが中華人民共和国時代、どのような社会・文化的な文脈の中でどのように位置づけられてきたかという問題について検討を行う³⁾。具体的な段取りとしては、まず 19 世紀から 20 世紀前半における新疆南部で実際に発生した歴史的イベントやそこで活動した歴史的人物に関わる民謡を取り上げ、それらの具体的な内容を明らかにするとともに、中華人民共和国の歌謡集や、歌謡に関する研究において、それら歴史歌謡の内容にどのような解釈と意義付けが加えられてきたのかについて考察を行う。その上で、清朝時代に記録された歴史歌謡の中で、中華人民共和国期に取り上げられた歌謡と同じテーマ性を有する、あるいは同じ歌詞内容を含む歌謡の内容と比較対照することを通して、中華人民共和国期における歴史歌謡の内容に関する解釈・評価の特徴とその背景にアプローチしたい。

1. 中華人民共和国期に収集・刊行された歌謡

まず、中華人民共和国期における少数民族の民謡、とくにウイグル族の民謡の収集・記録がどのように行われてきたか、その概要について見てみよう⁴⁾。

1950 年代後半に全国規模で少数民族地域において実施された少数民族社会歴史調査の一環として、新疆の各少数民族の民謡に関する調査・収集・記録・研究が行われた。

また、1960年代初期には、中国音楽家協会・民族音楽研究所等の主導により全国規模で民間文学・文芸の収集・記録・研究事業が推進された。文化大革命の時代に事業が滞ったものの、「改革開放」後の1980年代には作業が再開され、1990年代にはその総括とも言える『中国民間歌曲集成』が各省区ごとに編纂されるに至った。そこでは、各地域における各民族の音楽が中国の民族文化遺産ととらえられ、その保存と維持が提唱されている。新疆においても、地方レベルのものも含め、ウイグル語の歌謡集などが盛んに出版された。さらに2000年代になると、ユネスコの無形文化遺産に関する宣言（1998年）を受けて、無形文化遺産（非物質文化遺産）保護の機運が高まり、「国家級非物質文化遺産代表性項目」への指定が進められた⁵⁾。その中で、新疆少数民族の民間歌謡も部分的にその一部として登録されることとなった。

関連する重要な点として、1980年代以降、「改革開放」後の民族政策の緩和という情勢にとともに、民族言語・文化に関わる少数民族、とくにウイグル族自身の活動が活発化したことも看過できない。その中では、民間歌謡をはじめとする民間の口承文芸をウイグル民族文化の一環として評価し、その学術研究が盛んに推進された形跡がある。また、各地方における民間歌謡の歌詞テキスト・楽譜の出版、音楽CDやVCDの発行、メディアでの演唱・演奏活動などが活性化した⁶⁾。

このような動向の中で、本稿においては、公式的な中国民間歌曲の調査・収集事業の集大成と言える『中国民間歌曲集成』の新疆巻（《中国民間歌曲集成》全国編輯委員会《中国民間歌曲集成・新疆巻》編輯委員会1999）におけるウイグル族歌謡の部分⁷⁾と、ウイグル語出版物の民間歌謡集や口承文芸研究著作などに掲載された歌謡とを、比較の視点も交えながら紹介したい。

(1) 『中国民間歌曲集成』における歌謡

本書に収載された民間歌謡の大部分は、恋愛、生活、儀礼等に関わる歌謡である。歴史歌謡に当たるものはかなり限られている。たしかにイリ地域の歌謡については、清朝時代における労役等の具体的な状況に関する歌謡や、サディル・パルワンやギュレムハン、ヌズグムなど歴史上実際に活動したと伝えられる人物に関わる歌謡が組み込まれている。ただし、このことは本書に収載されたイリ地域の歌謡に特有な事情によるところが大きい。拙稿（新免2021）で明らかにしたように、イリ地域の歌謡は、アブドゥウェリ・ジャルツラヨフらの民間歌謡の歌い手によって統合・整理・セット化されたと考えられる。その結果が1950年代以後、上記のような中華人民共和国における少数民族文化の調査・収集・研究の中でアブドゥウェリ・ジャルツラヨフの演唱により記録され、それがいわば公的な出版物等の中で標準的なものと見なされてきた形跡がある。このようなプロセスに応

じて、漢語で刊行された『中国民間歌曲集成』にもそのままの形態、すなわち個々の歌謡とその配合・順序、セット化の様態において掲載されている。結果的に、その中の歴史歌謡が組み込まれたということである。

これに対し、カシュガルやアトウシュなど南新疆で採取された歌謡においては、具体的な歴史上の人物や事件・状況に関するテーマ性をもつことが確認できる歌謡は、本書においてはかなりまれである。たしかに、アトウシュ市の「康拜爾尼莎（一）」(492-493 頁)のように、実在したとされるカンバルニサという女性にまつわる歌謡も掲載されている⁸⁾。ただし、この人物は他の歴史史料においてその事績を確認できるような人物とはいえない。また、エイサ・ベグという人物の人々に対する圧迫を批判的に表現した歌謡（カシュガル地区沢普県の「清晨吹過一陣狂風」(338-340 頁)）や、スルタンの統治について詠んだ歌謡（アトウシュ市の「蘇丹統治着人民」(520-521 頁)）など、歴史的状況に関わると推測される歌謡も含まれている。説明では、後者のスルタンはカラ・ハン朝時代の君主とされている。しかし、これら人物の具体的な時代性については確定しがたい。他方、具体的な歴史的人物を扱っているものとして、毛沢東を称賛するような、中華人民共和国期に創作されたと思しき歌謡も散見される⁹⁾。これらは、中華人民共和国成立後に出現した、いわゆる「新民謡」に含まれると考えられる。

要するに、『中国民間歌曲集成』において、セット化されて演唱されたイリ地域の歌謡に結果的に組み込まれていたものを除けば、中華人民共和国以前の歴史的状況・人物に関わる歌謡はほとんど見出すことができない。しかし、(2)で示すように、このことは、南新疆においてそのような歌謡が1980・90年代に消滅していたことを意味するものではない。とすれば、民間歌謡というカテゴリーに対する特有の認識なりイメージに基づいて、編者や採集した人々が実際の歴史的事件・人物にまつわるような歌謡に対する関心が薄かった、あるいは何らかの理由から意図的にそのような歌謡が排除されている可能性も考えられる。

(2) ウイグル語出版物における歌謡

これに対し、ウイグル族の知識人・学者によって収集・出版された歌謡集においては、まったく異なる様相を見て取ることができる。19世紀後半から20世紀前半、すなわち清朝末期から中華民国期にかけて、カシュガルをはじめとする南新疆の地域において実際に生存した歴史上の人物に関する歌謡を、限定的ながら見出すことができるのである。

18世紀以来の新疆ウイグル地域の歴史の流れを眺めると、いくつかの段階が存在すると思われる。一つは、18世紀なかばにモンゴル系遊牧勢力のジュンガルを打倒した清朝が、ジュンガルの影響下にあった南新疆の地域を1759年に領域統合し、その統治下に置

いたことである。南新疆においてはウイグル族の有力者をベグ官職に任命して実際の行政を担当させる、いわば間接統治の体制が採用された。その約100年後の1864年に大規模なムスリム反乱が勃発し、各地に反乱政権が成立した後、隣接する中央アジアのコーカンド・ハン国からカシュガル方面に進出したヤークーブ・ベグは、南新疆の諸オアシスを統合する政権を樹立し、やがて東部のトルファンや烏魯木齊も統御するに至った。これにより新疆に対する統治が実質面で失われる危機に直面した清朝は、大規模な軍隊を派遣し、ヤークーブ・ベグ政権を打倒するとともに、1878年に新疆を領域として回復した。清朝は統治体制の根本的な改編を意図して新疆に省制を施行し、行政面での中国内地との統合化を図ることとなった。これも大きな転機と言える。したがって、ムスリム反乱とヤークーブ・ベグの政権は、清朝の統治が実質的に途絶えた点、またその後の清朝による新疆統治体制転換の契機となったという点で重要な意味をもつ。1911年に清朝が倒れ、中華民国に移行すると、新疆省では楊增新、金樹仁、盛世才といった漢人の政権が続くこととなる。この時代の政治・社会状況において注目されるのは、盛世才時代の初期を除き、ウイグル族が各地方の行政面を含め、新疆省の政治に指導的な立場で参画する機会が得られなかった一方で、新たに台頭した新興資本家層などによって主導され、近代的な新方式の学校教育が勃興するなど、ウイグル族自身の手によって社会近代化への道筋が示されたことである。

このような歴史過程において、清朝統治期の19世紀後半のムスリム反乱において政権を掌握したヤークーブ・ベグ、そして中華民国期において地方を管轄した省政府の官僚、そして近代化のための活動を展開したウイグル族指導者、などに関する歌謡が、1980年代以後に刊行されたウイグル語の民間歌謡集や民間文学の研究著作などに記録されている。以下に紹介してみる。

① ヤークーブ・ベグ

清朝時代の諸事件や人物に関する南新疆の民間歌謡を見てみると、おもにヤークーブ・ベグに関するものに限定されている印象を受ける。比較的早い時期に出版された『ウイグル民間歌謡』シリーズの第3巻（1984年刊行）に提示されたヤークーブ・ベグに関する歌謡の歌詞テキストを、抜粋で以下に掲げてみよう（*Uyghur Xelq Naxshiliri* (3) 1983: 304-306）。

ヤークーブ・ベグはモスクを設えた / キブラ¹⁰⁾を整え
 宝庫を満杯にした / 庶民たちから盗み取り
 …（中略）…
 ヤークーブ・ベグは得意になった / 貧乏人は災いにあった

圧制者は寄食者 / 農民に災いとなった
 … (中略) …
 ヤークーブ・ベグの歩兵は / タイフー(=火砲の一種)を撃てなかった
 ハーン¹¹⁾の兵隊が来ると / 逃げて救われない
 ヤークーブ・ベグはクマネズミ / 労役を多く放った
 ベジン(=北京)から軍隊¹²⁾が来ると / 壁に沿って逃げた
 ヤークーブ・ベグも死んだという / 死んだとすればそれでよい
 彼が横たわる墓には / 犬や狼たちが吠えたという
 (彼は) 囲いの中で毒を飲んだ¹³⁾ / 今日はコーカンドで追悼が
 貧者たちは欣喜した / 彼を薪で焼いて¹⁴⁾

ここでは、ヤークーブ・ベグがイスラームを重視してモスクの整備等の事業を行う反面、貧しい庶民たちを圧迫したこと、反乱鎮圧を目的として進攻した清朝軍に対して戦わずに逃げて毒を仰いで死んだことについて言及され、きわめて否定的な評価の下に描写されている。少なくとも政権の末期においては、ウイグル族の歴史家であるムッラー・ムーサーが20世紀初頭に著した『ターリーヒ・ハミーディー』(ハミードの歴史)で記しているように、統治下の人々の中に不満が醸成されていた形跡もある(Mulla Musa 1988: 522-523)。このような内容の歌謡が当時存在したとしても不思議ではない。しかし、当のムッラー・ムーサー自身、ヤークーブ・ベグに対する評価において、正負両面について系統的に叙述しており、とくにイスラーム法の厳格な執行やイスラーム知識人の尊重、自らの質素な生活態度などについて高く評価している(Molla Musa 1988: 495-526)。立場によってばらつきが見られると考えられるものの、少なくとも一部のイスラーム知識人たちがプラスの評価でもってこの政権を見ていたことは否定できない。

当該歌謡が掲載されている『ウイグル民間歌謡』は、当該歌謡に付加された解説において、ヤークーブ・ベグが帝国主義、とくにコーカンド・ハン国のマダリー・ハンの扇動に応じて新疆に侵入し¹⁵⁾、「祖国」(=中国)を分裂させる自らの政権を立てたこと、新疆の諸民族に災厄をもたらしたことを強調している(Uyghur Xelq Naxshiliri (3) 1983: 306)。そもそも現代中国における公式見解においてヤークーブ・ベグは、コーカンド・ハン国から清朝の領域に侵入して政権をたてた侵略者であり、英国など帝国主義の中国侵略のための「工具」であったと位置づけられている。すなわち、中国の歴史上、外部勢力と結託してその国家領域の保全や国家統合を脅かした「悪」として描写され、その点はどの歴史叙述においても常に一貫して保持されている。とくにこのような評価は、中華人民共和国成立後日の浅い1950年代、新疆省人民政府主席などを歴任したブルハン(包爾漢)¹⁶⁾によっ

て著された論文において、すでに明確に規定されている（包爾漢 1958）。すなわち、ムスリムにより独立政権が成立し、清朝の統治から実質的に離脱した経緯は、国家統合を重視する立場から徹底的に否定的な評価が下されているのである。

このように考えてくると、『ウイグル民間歌謡』で提示されている歌謡は、実際に当時存在し、それが20世紀後半まで伝えられてきたと考えられるものの、中華人民共和国における公式見解に沿った内容をもっているという点から、そのような傾向のものが選択的に提示されている可能性もある。

② 馬提台

前述のように、中華民国成立後の新疆においては、漢人の政治指導者が新疆省を独裁的に統治する体制が形づくられた。最初の支配者であった楊増新の下でカシュガル地域の行政を担ったのは、楊増新によって派遣された提台の馬福興という人物であった。回民（＝現在の回族）である馬の任用は、同じムスリムでありながら民族の異なる人物にテュルク系ムスリムに対する行政を行わせ、コントロールさせるという楊増新の巧妙な方策によるものであろう。フォーブズの研究によれば、1915年に回民の軍隊を率いてカシュガルの新城に着任した、馬はその指揮下の回民の軍事力を背景に、カシュガルの旧城（回城）¹⁷⁾に駐在する文官の道台を抑えて、カシュガル地域の実権を掌握し、カシュガル地域のウイグル族社会に対して専制的な統治を行ったと言われる。当地域のウイグル族に対して、恣意的にきわめて残虐な扱いをとっていた形跡もある¹⁸⁾。しかし、その甚だしい専横についてはやがて楊増新の耳に入ることになり、楊増新によって派遣された馬紹武によって捕えられ、1924年に公開処刑されたという（Forbes 1986: 21-28）。1980・90年代、幾人かの研究者がこの馬福興に関する歌謡について、歌詞を掲げながら言及している。ここではメヘンメトジャン・サディクの研究で掲げられている歌謡から以下にその一部の歌詞を掲げてみる（Mehemmetjan Sadiq 1995: 274-275）。

馬提台は60歳で / トックズ・タシュに橋を設えた
 馬提台の労役は / この（＝我々の）頭に災厄だった
 …（中略）…
 疏附への道は葦の茂み / 刈り取ることはない
 14年間、まちを治め / 馬提台のような者はない
 馬提台はくまねずみ / 労役を多く撒いた
 自分を大きく押し量り / 絞首刑になって倒れた

この歌謡では、馬福興が労役により人々を苦しめたこと、それが14年間にわたったこ

と、最終的に絞首刑に処せられたことが歌われている。メヘンメトジャン・サディクの解説によると、馬提台が処刑されたのは、「支配階級」内部における事情によるが、そこには人々の馬提台に対してとった闘争も大きな役割を演じたとされている。その上で、このコシャックが楊増新政権下における階級的圧迫と民族的圧迫の反映であり、馬がカシュガルに敷いた圧政と、それに対する人々の怒りを示しているという。すなわち、階級史観に立った上で、当時の支配者の庶民に対する横暴と民衆側のそれに対する否定的な感情を表現するものとして、前面に押し出されている。ただし、ここでは民族的圧迫という語にも注意すべきであろう。すなわち、この歌謡の解釈において、異民族による恣意的で圧迫的な行政執行に対する不満の表明という点も示唆していると考えられる。ここには、1980・90年代におけるウイグル族知識人の歴史認識と民族的な立場が反映されている面もあると推測される。

③ タシュ・アホン

タシュ・アホンに関する歌謡は、いくつかの歴史歌謡集や民間文学研究著作に掲げられており、比較的広く知られた歌謡であったと思われる。

タシュ・アホンは、20世紀初頭に活動した、カシュガル郊外に位置するアトゥシュ出身の資本家であり、近代的な新方式教育の推進に尽力した人物としても知られる。当時のカシュガルの周辺地域において一定の知名度があったと考えられる。中華民国時代の1940年代におけるいわゆる「三区革命」の指導者であり、中華人民共和国時代のウイグル族の政治家として著名なセイピディン・エズィズィ¹⁹⁾は、このタシュ・アホンの息子である。

セイピディンの回想録によれば、タシュ・アホンの元来の名はアブドゥラシドであったが、強健で強力な人になるようにという願いからその父より「タシュ」(=石)という名を与えられ、周囲の人々はみな「タシュ・アホン」と呼び習わしていたという。中等以上の宗教教育を受けたと思しき知識をもち、また近代的な科学知識にも通暁していた。若い頃より商業に従事するとともに、辛亥革命前後に学校を開設し、人々に新思想の宣伝を行ったが、哥老会の活動に参加したという理由で当局により逮捕され、ロシア領に流亡を余儀なくされた。ロシア領の中央アジア、モスクワ、サンクト・ペテルブルグなどに滞在したが、3・4年後に帰国した。その際の見聞をもとに、ヤルカンドにマッチ工場を設立し、カシュガルでも2・3箇所水力を動力とする小規模な綿花工場を開設したという²⁰⁾。しかし、やがてヤルカンドのマッチ工場は操業停止となり、多額の負債を負った。他方、ロシア領からの帰国後、タシュ・アホンは近代的な新方式の学校を創立するなど啓蒙的な活動にも従事した(Seypidin Ezizi 1997: 20-22)。工場の経営や交易活動を取りやめてからタシュ・アホンは、新方式学校の開設・運営などに大部分の時間を費やすように

なった（Seypidin Ezizi 1997: 29）。

ヤルカンドのマッチ工場が閉鎖になり、経済的な危機的状況に陥ったため、息子たちはソ連領に出て商売を行った。ところが、あるアフガン人商人に用意してもらった羊の皮や腸が、ソ連の官憲から密輸商品とみなされて没収されてしまい、そのアフガン人はタシュ・アホンを道台²¹⁾に訴えてた。道台衙門からの追及を逃れたタシュ・アホンはイリに逃亡したが、1年後の1929年にイリで客死したという。

さて、各歌謡集や研究著作に掲げられたタシュ・アホンの歌謡の歌詞には、かなり共通性が見られる。ここではその中で、コシャック集とはいえ²²⁾、比較的早期に出版されたウチクンジャン・ウメル『ウイグル歴史コシャック』に掲載されたものの一部を以下に掲げる（Uchqunjan Ömer 1981: 93-94）

タシュ・アホヌム²³⁾は吝嗇だそうさ²⁴⁾ / 娶った夫人は若いそうさ
木綿に小さい花を染め / アンバン²⁵⁾とともに頭となったそうさ
タシュ・アホヌムは高利貸し / バザールを1年間その手に握った
金儲けの思いで / マザールを投げ捨てた
沼に降りたあひるを / 愚かな子どもたちはガチョウという
66人のお手伝いを / タシュ・アホヌムは少ないという
天空にある月を見よ / タシュ・アホヌムの富を見よ

歌詞の中で、「木綿に小さい花を染め」というのは、セイピディンの説明によれば、タシュ・アホンはロシアから戻って来たとき、白い粗布を花柄で染めることを考案し、それに自ら「しゅす王」と名付けたという（Seypidin Ezizi 1997: 65-66）。この歌詞は、このような事実に基づきつつ、「高利貸」という語句や、「富を見よ」という文言により、新興の資本家・経営者としていわば一旗揚げた人物に対する、庶民側のある種の感情が反映されていると思われる。

他方、「金儲けの思いで／マザールを投げ捨てた」の箇所について、マザール（＝イスラーム聖者墓廟）というの、アトゥシュにあるストック・ボグラ・ハンの墓廟を指す。このマザールは、新疆ウイグル地域における主要なイスラーム聖者墓廟の一つであり、葬られているとされるストック・ボグラ・ハンはカラ・ハン朝の君主で、この地域で最初にムスリムになったという伝説をもつ人物である²⁶⁾。タシュ・アホンは、当該マザールが洪水で流された後、その再建を目指して着工したが、理由はわからないものの、途中で建築事業を放棄したという。セイピディンは、「人々は、この偉大な墓廟を修築せずに投げ出した、と不満を示したのに違いない」と述懐している（Seypidin Ezizi 1997: 66）。

わかりにくいのは、暗喩的表現と言える「沼に降りたあひるを／愚かな子どもたちはガチョウという」の部分である。コシャックに関するズムレット・ガッパルの研究によれば、コシャックにおいてあひるとガチョウは対照的に扱われることが多く、一般にあひるは人にとっての敵を、また不実な恥知らずの凶々しい人を象徴するのに対し、ガチョウは友人を象徴するとされる (Zumret Ghappar 2012: 277)。つまり、この歌詞では、若者たちはタシュ・アホンに好感を抱いていたのに対し、その実態は「あひる」だと否定的な見方を提示していることになる。要するに、この歌謡においては、その活動と性向に関する描写とともに、目新しいことを始めて富を蓄え、一時期威勢を示した「成金」的な人物に対する、歌謡の歌い手・受けて側 (= 民衆) の羨望や皮肉が入り混じった、いくらか否定的な感情が織り込まれているように感じられる。

しかし、この歌謡を掲載したウチクンジャン・ウメルの解説では、タシュ・アホンが進歩的な指導者であったと前置きした後、工場の設置・経営等の事業や活動の経緯を述べ、「このような事業によって人望ある名士になった」と指摘する。その上で、この歌謡が当時のこのような社会状況を反映するものであると述べている。すなわち、歌謡の内容のニュアンスとはややずれを生じながら、タシュ・アホンは歴史上、高評価を与えるべき人物として取り上げられている。このような評価は、20年あまり後に刊行された前述のズムレット・ガッパルの研究においても、基本的に踏襲されている (Zumret Ghappar 2012: 99-100)。

これに対し、前述のメヘンメトジャン・サディクの歴史コシャック・歌謡に関する分類において、詩句をほぼ同じくするタシュ・アホンのコシャックは政治的なコシャックの中に含まれている。政治的なコシャックにおいては、「高利貸のバイ (金持ち) たちの貪欲さ、寄食性 (たかり気質)、残虐さが鋭く風刺され、その恥ずべき面目が暴露される」とされ、そのようなコシャックの代表格として当該コシャックが挙げられる (Mehemmetjan Sadiq: 233)。

このように、歌謡 (やコシャック) に付随して加えられた解説には、タシュ・アホンに対する評価においてヴァリエーションが見られる。中華人民共和国に特有なイデオロギーにしたがい、前者は発展史観から、封建主義的な社会において新興ブルジョワジーの出現という歴史的状況を評価するという立場の表れかもしれない。他方、後者はおそらく階級闘争史観に立脚して、資本家に対する批判的姿勢が示されているということであろう。

ただし、前者については、別の側面も見て取ることができる。前述のように「改革開放」後の民族政策の緩和にともない、少数民族、とくにウイグル族の間では、知識人や民族幹部の間で、自らの民族の歴史・文化を「再発見」し、それを強調して前面に打ち出す動向が顕在化した。歴史面においては、とくに歴史上の当該地域における知識人、例えば

マフムード・カシュガリーやユースフ・ハース・ハージブなどをウイグル族の民族偉人としてとらえて、その墓廟を改めて建造するなどの現象が表面化した。また、近代史の分野においては、地域の近代化の流れの中で、新しく台頭したウイグル族の資本家・知識人などの指導者層の主体的な活動が、西方イスラーム地域からの影響下、ウイグル族社会における産業の工業化や、とくに近代的な新方式教育の勃興・発展に決定的な役割を担った点について、さまざまな事実関係の掘り起こしや、それに基づく歴史叙述の出版などが進められた²⁷⁾。

タシュ・アホンが人々に先駆けて近代的な工業の振興に邁進した点について勘案すれば、歌謡集等におけるタシュ・アホンに対する肯定的評価は、上記のような1980年代以降のウイグル族社会における特有な文化的潮流の一環として位置づけることもできるだろう。その結果、その解説は歌謡のテイストとは微妙にずれが生じたのであろう。他方、後者の階級闘争史観に基づく「高利貸のバイたちの貪欲さ…が鋭く風刺され、その恥ずべき面目が暴露される」という断定も、歌謡の微妙なニュアンスとはややずれがあるように思われる。前述のように、歌謡それ自体には、新規の事業を始めて威勢を示した成金の人物に対する民衆側の羨望と否定的感情が入り混じった素朴な認識が反映されていると考えられるからである。

なお、アブドゥカディル・ダモッラ (Abduqadir Damolla) の歌謡についても、取り上げられた人物に対して高評価が打ち出されているという点において、同様の事情を看取することができる。アブドゥカディル・ダモッラは、メッカ巡礼で西方イスラーム世界での新しい改革的な潮流に触れた後、1910年代にカシュガルで近代的な新方式の教育活動に着手した、先駆的な指導者である²⁸⁾。タシュ・アホンも新方式教育に注力したと伝えられており、当時のカシュガルで「先進的」な活動に従事したという点で類似性をもち、このことが肯定的な評価につながっていると考えられる。

2. 清朝統治期に収集・記録された歌謡

(1) ヤークーブ・ベグに関する歌謡

1. において紹介した歌謡は、いずれも中華人民共和国期になってから、とくに1980・90年代の特有な社会・文化状況の中で、各種歌謡集や研究著作などに掲載され、あるいは引用される形で提示されたものである。これに対し、歴史を遡って清朝～中華民国期、とくに各歌謡のテーマ性を彩っている歴史的事象や人物などの時代もしくはそれらに近い時代に、該当する歌謡がどのような形態をとっていたのか、また、同様のテーマ性をもった歌謡としてどのような形態・内容のものが存在したのかという問題は、中華人民

共和国におけるこれら歌謡に対する扱いと位置づけを考える上で、避けて通れない点である。

しかし、同時代に、少なくともこの地域の歌謡について、政府の主導により、組織的な収集・記録活動が行われた形跡はない。ただし、19世紀後半より、ヨーロッパやロシアの研究者等がこの地域で社会・文化の学術的な調査や考古学調査に従事し、その際に民間歌謡にも注目して、収集・研究を実施した例がある。すでに拙稿で明らかにしたように、ロシアの言語学者・民族学者であるラドロフ、パントウソフ、マローフや、フランスのゲルナール、いわゆる西域での考古学調査で有名なドイツのル・コック、などがそれに当たる（新免 2021：249-253）。とくにロシア帝国のセミレチエ地域（現在のカザフスタン共和国東南部）において官吏・学者として活動したパントウソフは、イリ地域に比較的長期間滞在して、民間歌謡の収集・出版、またウイグル族知識人によるチャガタイ語文学作品の刊行などの仕事に従事した。その主な対象としてはイリ地域に重点を置いているが、南新疆での諸事件と人物、とりわけヤークーブ・ベグと関連する人物にまつわる歌謡に関する著作も発表している。また、1890年代にホタンなど新疆南部地域の調査に当たったゲルナールも、いくらか歌謡の記録を残している。

そこで、ここでは、上記の中華人民共和国期に発表されたヤークーブ・ベグに関わる歌謡との比較も視野に入れつつ、19世紀後半にパントウソフによって収集・記録された歌謡を検討してみよう。

パントウソフの記録したヤークーブ・ベグと関連人物に関する歌謡は、『イリ地方タランチ人研究資料』第6巻に収められている。その中には、①ベグ・パチャ、②ミール・アマン・シャイフ、③マフムード・ハーン、④ズウントゥン、⑤トゥルディ・アホン、の5つの歌謡が含まれている。①のベグ・パチャというのは、ヤークーブ・ベグの長男であるベグ・クリ・ベグを指している。この歌謡の内容を見てみると、ヤークーブ・ベグ自身に関わる歌詞をかなり含んでいることがわかる。③のマフムード・ハーンは、前述のストゥク・ボグラ・ハンの墓廟のシャイフであったミール・アフマド・シャイフの息子のうちの一人であり、ヤークーブ・ベグ政権時代に有力者の地位にあった人物である。②のミール・アマン・シャイフは、説明ではマフムード・ハーンの父とされるので、おそらくはミール・アフマド・シャイフを指していると思われる²⁹⁾。④のズウントゥンは、清朝の新疆回復のための軍事行動において中心的な役割を担い、その後新疆省の初代巡撫を務めた劉錦棠を指すと見て間違いない。⑤のトゥルディ・アホンは、ヤークーブ・ベグによって厚遇された一庶民の名前である。このように見てくると、これらの歌謡がもつテーマ性は、ヤークーブ・ベグ政権の中心人物からその配下の有力者、庶民、そして敵対する清朝の將軍まで、同時代のさまざまな背景をもつ人物たちを、実に絶妙な配合で提示

していることがわかる。パントゥソフの研究者としてのセンスが窺われるとともに、これが民衆の間に元来流布していたものだとするならば、歌謡が対象とする人物の幅広さと物語性の豊かさを如実に表していると考えられる³⁰⁾。

ここでは、第1章において言及したヤークーブ・ベグに関する歌謡を視野に置く形で、主に①のベグ・バチャの歌謡（Pantusov 1901: 7-9）について具体的な歌詞の紹介も交えつつ取り上げる。

この歌謡においてはまず、清朝軍の進撃と新疆制圧に際して、ヤークーブ・ベグの死後、ベグ・クリ・ベグが弟のハック・クリ・ベグを殺害した後、清朝軍に対抗できずにロシア領（＝旧コーカンド・ハン国領³¹⁾）に逃れた³²⁾、という事態の経緯に関わる状況が、やや批判的なトーンで明らかにされる。このような歌詞内容の示すものは、基本的に事実関係に基づいている。

彼（＝ベグ・バチャ）の（発行した）金銭は灰になった、その夫人たちは寡婦となった

ベグ・バチャの子どもたちは、ズントウンに奴僕となった
バァチン（＝北京）のヒタイ³³⁾たちは、ひばりを我が牛という

ベグ・バチャの子どもたちは、ズントウンを我が父という
アク・クリ・ベグは若者だそうだ、イギト³⁴⁾たちに頭目だったそうだ

アク・クリ・ベグを殺したのは、ベグ・バチャという若者だそうだ³⁵⁾
バァチンから来たヒタイは、ひばりを我が牛という

アンジャン人（＝コーカンド・ハン国人）の子どもたちは、ヒタイを我が父という
あなたがアンジャンに行くことになるならば、ベグ・バチャに祈りを唱えなさい

夫人はどこにとかれが言うならば、異教徒の手に（落ちた）と言いなさい

「ベグ・バチャの子どもたちは、ズントウンを我が父という」や「夫人はどこにとかれが言うならば、異教徒の手に」という文言は、ベグ・クリ・ベグの妻や子供たちが、「北京から来たヒタイたち」、すなわち清朝軍によって捕えられたことを意味している。

ところが、これに続く部分においては、時間を遡る形で、ヤークーブ・ベグの異教徒に対する戦いと優位性を示す歌詞、ヤークーブ・ベグの死に関する一連の詩句が現れる。

ヤークーブ・ベグのような男はいるか、このように建てられた都市はあるか

ヤークーブ・ベグが出てくるならば、異教徒（kāfir）たちに命はあるか

…（中略）…

ヤークーブ・ベグはふうと言った、水を茶碗一杯と言った³⁶⁾

死の宿命が至り来たれば、私にとって運命はこれだと（かれは）言った
ヤンギ・シャフル（＝カシュガルの「新城」）の城門は、ときに開かれ、ときに閉じられる

ヤークーブ・ベグのような王者は、いまやどこに見いだせるか
天にいる天使が、天女たちの衣装を着ている

泣きなさるな（ヤークーブ・ベグの）夫人たちよ、我がヤークーブ・ベグは天国に

バアチンからヒタイがやって来た、歯を食いしばって

アンジャン人は身を起こして逃げた、しっぽを立てて³⁷⁾

ヤークーブ・ベグの死に関する詩句の後、ヤークーブ・ベグを称賛する文言が、その異教徒に対して戦う勇敢な資質と王者としての美点とともに連ねられる。

ヤークーブ・ベグは公正な（王者）、人々に有益な（ことをなした）

いまやどこに見いだせる、ヤークーブ・ベグのように豊かな（王者を）

我がヤークーブ・ベグは戦いをなした、異教徒たちを平らげた

軍隊のすべてを、金・銀色にした（＝輝かせた）

ヤークーブ・ベグは自身が勇者、異教徒に矢を射る

死んだヒタイの頭は、谷間の石のように横たわる

ヤークーブ・ベグはハーンのように進む、その御顔は満月のよう

美しく黒い瞳、三日月の眉、そのまつ毛は泉のよう

ヤークーブ・ベグは有能で、戦いに大胆だ

ヒタイとトゥンガンに対し、その剣は鋭利だ

ヤークーブ・ベグは自身善良、15の都市にハーンになった

…（後略）…

ここにおいては、ヤークーブ・ベグの属性として、異教徒に立ち向かったムスリムとしての英雄性と優れた王者としての品格が打ち出されている。またそれは、冒頭部における、清朝軍に対抗できずに逃走したとみなされた息子のベグ・クリ・ベグに対する描写の様態と対応するものである。このような歌詞内容の傾向性は、ヤークーブ・ベグに対する認識のあり方という点において、ヤークーブ・ベグに対する否定的な評価をまとっていた、前述の中華人民共和国時期に出版された歌謡集における歌謡の歌詞とは、まったく対

照的と言っても過言ではない。

ところで、少なくともヤークーブ・ベグ政権が維持されていた時期、ロシアにとって、ヤークーブ・ベグの政権は当該地域をめぐる政治的関係の文脈において、必ずしも好ましい存在であったとは言い難い。隣接する中央アジアを征服して統治し始めたロシアにとって、ヤークーブ・ベグ政権は、清朝の領域における反乱の結果出現した政権であったこと、ロシアと対抗関係にある英国と親しい関係を結んでいたことなどの事情から、地域における不安定要素と見なされた可能性がある。そのような認識の様態は、この歌謡が採取された19世紀末の段階においても変化はなかったと考えられる。すなわち、当時のロシア人研究者にとって、政治的な立場に基づきつつ殊更ヤークーブ・ベグを讃仰するような内容の歌謡を選択して、もしくは「創作」して出版物に掲載する、特段の理由はなかったと推測されるのである。したがって、ヤークーブ・ベグに高評価を下す内容のこのような歌謡が、民衆の間でとくに例外的な存在であったとは考えにくい。とすれば、1. で検討した中華人民共和国における歌謡集でヤークーブ・ベグに批判的な内容の歌謡が掲載されているのは、たまたまそのような歌謡のみが出版当時まで残存していたという可能性も否定はできないものの、やはりある程度意図的にそのような内容の傾向性を帯びた歌謡が選択されて掲載された可能性も考えられるのである。

ここで注目されるのは、フランスのグルナールの1890年代における新疆南部での調査でも、ベグ・クリ・ベグに関する歌謡が収集され、報告書に掲載されていることである（Dutreuil de Rhins 1898: 98-100）。

バダウラト³⁸⁾は死んでしまった、春の季節に

ベグ・バチャは身を起こして逃げた、犠牲祭の礼拝のときに

バァチンから軍隊が来た、30人のアンバンがそれを率いて

ベグ・バチャは身を起こして逃げた、ダーフーとシューフー³⁹⁾を率いて

君がアンディジャンに行くことになるなら、ベグ・バチャに祈りを唱えなさい

夫人たちはどこにと（ベグ・バチャが）言ったら、異教徒の手にと言いなさい

…（中略）…

アクスへの道は胡楊樹に満ち、ベグの手は縛られて

ハック・クリ・ベグの墓は、赤い血に染められて

甘い桃の実は、一つ一つが分かたれた

ベグ・バチャという腹黒は、弟から分かたれた

この歌詞においては、ベグ・クリ・ベグが、清朝軍の進撃に対して逃走し、ロシア領

(旧コーカンド・ハン国領)に戻ったこと、弟のハック・クリ・ベグを殺害したことなど、ヤークーブ・ベグ死後のベグ・クリ・ベグの行状に関する、かなり批判的なトーンが感じられる。これは、前掲のパントゥソフ収集の歌謡と類似する傾向性を示していると言える。また、注意深く見てみると、その中に類似する詩句が織り込まれている⁴⁰⁾。このことは、19世紀末の段階において、前掲のパントゥソフの収集したヤークーブ・ベグに関する歌謡が、必ずしも例外的な内容のものではなかったことを示唆している。

(2) トルファンの子守歌

1. で扱った歴史歌謡を彩る歴史上の人物に直接的に対応するものではないものの、ヤークーブ・ベグの時代の具体的状況に関わる内容をもつ歌謡が、1910年代のトルファン盆地で記録されているので、付随的にここで取り上げてみる。

1910年代にドイツの西域調査隊で中心的な役割を担ったル・コックは、トルファン盆地での発掘調査のためにカラホジャの地に家を借りて滞在していた折、地主の娘が歌った子守唄を記録した。この娘に当たる若い女性は、15歳でトルファンのある地主と結婚したが、扱いがひどかったので実家に戻ってきた。その後赤ん坊が生まれ、子守の際にいくつかの歌を歌っていた。ル・コックはそれらに関心を抱き、その女性の許可を得て、そのうちの3つを記録した。これらのうちの2つは、精神的な病で亡くなった若いカラホジャの人によって創作されたものだという。

注目されるのは3番目の歌謡で、ヤークーブ・ベグの兵士の一人が、ダバンチン（達坂城）の美しい娘であるアムバル・ハンに対して奉じた愛の歌である。ダバンチンは、ウルムチからトルファンに向かう幹線道の途中、天山山脈の分水嶺に位置する峠のまちで、天山の北側の地域と南側の地域を結ぶ交通路上の要衝の地である。ヤークーブ・ベグは清朝軍の進撃を防御するために、ダバンチンに要塞を構築し、軍隊を駐屯させた。1877年春、この地で、天山の北側の地域からトルファン盆地に向けて進撃してきた清朝軍との間で激戦が行われた。ヤークーブ・ベグ側は敗北し（新免 1987: 23）、ル・コックの言葉に従えば、「2人の恋人は永遠に別れた」ということになる（Le Coq 1928: 68-69）。3番目の歌謡の歌詞は、以下の通りである（Le Coq 1928: 70）。

ダバンチンの土は固く / スイカは甘い
 ダバンチンに恋人がいる / その名はアムバル・ハン
 アムバル・ハンの髪は長く / 地に触れるか？
 アムバル・ハンに尋ねてごらん / 男をとるか？
 私の小さな真珠は散らばった / （君はそれを）集めてくれるかね？

（君に）接吻をと言っても私の背が足りない / （君は）かがんでくれるかね？
 （君は）馬を駆けさせ / 水の峠を越えて
 良い人に満足し / 悪い人（＝男性）とともに（君は生涯を過ごす）
 私が（ここで）眺めても（彼女は）見えない / ダバンチンにある要塞
 悪いことは理不尽だろう / アムバル・ハンから離別してしまった

興味深いことに、前述の『中国民間歌曲集成』の新疆巻には、「達坂城」（ダバンチン）という歌謡が掲載されており、その歌詞の冒頭部に「ダバンチンの道は非常に固く／スイカは本当に甘い」「そこにはよい娘がいる／その名はカンバル・ハン」という一節が現れる（《中国民間歌曲集成》全国編輯委員会《中国民間歌曲集成・新疆巻》編輯委員会（1999）：82）。娘の名前に微妙なずれが見られるものの、ル・コックの記録した歌謡の冒頭部分とはほぼ同様の内容である。ただし、その後の内容はまったく異なっている。この歌謡の演唱者は依米提となっており、この歌謡が含まれている地域としての「吐魯番」地区枠における他の歌謡の演唱者とは異なる。また、この依米提はこれ以外の歌謡の演唱者としては顔を見せない。本歌曲集成においては、個々の歌謡について、演唱者の名前、場合により訳詞者等の名前が付されているものの、採取時期・場所についてのデータが示されていない。

また、すでにレイチェル・ハリスの研究で指摘されているように、ウイグル族の民間歌謡を元にしたとされる王洛賓の歌謡「達坂城的姑娘」（ダバンチンの娘）には、その冒頭にやはり同様の歌詞部分が見いだされる（Harris 2005: 397-398）。周知のように王洛賓は、ウイグル族などと共に中国西北部の少数民族の民謡について歌詞を漢語に移すなどアレンジして発表し、一世を風靡した漢族の音楽家・歌手である。ただし、王の当該歌謡においても、後半の歌詞はやはりル・コックの記録した歌謡とは異なっており、「嫁に行くなら他には行くな、必ず俺の嫁になれ」というように、馬車夫がダバンチンの娘への恋情を表したものとされる（小笠原・小笠原 2011：41）。すなわち、特定の歴史的な事件・人物に関わる性格をもつ歌謡ではない。

この歌謡は、王洛賓が蘭州で整理・作詞編曲したものであるという。1938年に、ソ連からの抗日戦援助物資を輸送するトラック隊が蘭州を通過した際、王洛賓所属の抗日戦劇団がトラック隊員を慰労した。その席上、ウイグル族運転手が歌った歌を記録した上で、そのメロディーを編曲するとともに、元々の歌詞の漢語訳をもとにアレンジした歌詞をそれに加えた歌曲を創作した。それが「達坂城的姑娘」である。これは、王がウイグル族の民謡を改編して成った彼自身の歌謡の最初のものであったと言われ（小笠原、小笠原 2011：75-76；王、言 2013：29-32）、王の代表作の一つと見なされる。

ここで興味深いのは、1910年代にトルファン盆地で記録された、具体的な歴史的事件に因んだ歌謡が、1930年代に蘭州で採取された歌謡、そして中華人民共和国成立後の1990年代に編纂された民間歌謡集に掲載された歌謡との間に、共通する部分を含む一方で、後半部がまったく異なるとともに、後二者では歴史的な状況に即した文脈で語られていないことである。レイチェル・ハリスの研究では、現代のウイグル知識人の中には、王洛賓による歌謡のルーツをル・コックの記録した歌謡に求める見解があることを明らかにした上で、そこに、現代のウイグル族にとっては民間歌謡が単なる口承文芸でも現代中国風の「人民の声」でもなく、ウイグル民族史の表象形態と見なされている、という理解を見出している(Harris 2005: 399-400)。ル・コックの記録した歌謡と、その後の歌謡との間の関係性やつながり、また、それらの歌詞における共通性とずれがどのような背景の下に立ち現れているのかという問題について、ここで性急に断定的なことを言うのは難しい。しかし、1910年代に実際に若い女性によって歌われた子守歌の歌詞が、反乱の結果成立した政権の軍隊と清朝軍との雌雄を決するような戦闘という、歴史上のきわめて切迫した場面をその背景として設定しているのに対し、現代中国において、公式的な歌謡集や漢族の発表した歌謡で類似する歌謡が具体的な歴史性をともなわない恋愛歌として提示されているという、この著しい落差には、印象深いものがある。

おわりに

ウイグル族の民間歌謡の中には、具体的な歴史的状況や人物に関わるテーマ性をもつ歌謡が含まれている。その中で19世紀後半～20世紀前半の新疆南部における歴史事象、とくに特徴的な人物に関わる歌謡をとりあげ、それらが中華人民共和国の公式的な民間歌謡集やウイグル族による歌謡集・研究著作において具体的にどのように扱われているかについて検討した。その結果、①中華人民共和国期におけるこれら歴史歌謡に対する解釈や位置づけが、同国家に特有な政治的・社会的条件に大きく規定される一方で、②改革開放後に顕在化した、ウイグル族による自らの民族史・民族文化に関する活動の強い影響下にある、ということが明らかになった。前者の①の傾向は、19世紀末～20世紀初頭に採取された歴史歌謡との比較対照により、とくにヤーケープ・ベグに関わる歌謡の選択と解釈において顕著であった。他方、タシュ・アホンに関する歌謡においては、①・②両者の傾向がそれぞれの著者の解釈に強く現れる一方で、歌謡の内容自体には必ずしもこのような言説の傾向性に規定されない、当時の庶民感覚における微妙なニュアンスが浮き彫りになっていると言えよう。

19～20世紀の歴史上の人物に関わるものでありながら、本稿において扱うことのでき

なかった歌謡も少なくない。とくに物語性を帯びた人物に関わる歌謡や、ヤークーブ・ベグと同時代の関連人物に関わる歌謡などである。それらの検討については、他日を期したい。

付記

本稿で利用した資料の調査・収集に当たっては、デイリヤーラ・ウスマノヴァ先生、濱本真実先生、小沼孝博先生より一方ならぬご助力をたまわった。記して深甚の謝意を表したい。

注

- 1) ウイグル語で歌謡は「ナフシャ」(naxsha) と呼ばれる。民間歌謡は xelq naxshisi. 「ナフシャ」のほか、「コシャック」という言葉があり、民衆の間で詠われる詩を意味するが、広い意味でのコシャックは、かなりの部分がメロディーに乗せて歌われ、歌謡（ナフシャ）として受容される。すなわち、歌謡の歌詞がコシャックとして位置づけられるという側面もある。コシャックとナフシャの関係については、拙稿を参照（新免 2021：228-232）。本稿においては、ナフシャとコシャックを含めて検討対象とする。
- 2) ウイグル音楽の研究で著名な研究者である周吉の分類による。歴史歌謡はさらに、英雄的な人物を賞賛する歌謡、統治階級（の圧迫）を暴露する歌謡、歴史上の名人が自ら歌い、継承されてきた歌謡、の3種類からなるという（周 1982：19-20）。
- 3) すでにイリ地域における歴史歌謡については拙稿で扱ったので（新免 2021）、本稿では新疆南部のオアシス地域での歴史的事件・人物に関わる歌謡に重点を置く。
- 4) 詳しくは、拙稿を参照されたい（新免 2021：239-249）。
- 5) 中国における無形文化遺産保護の潮流については、白松強の研究（白 2015）を参照。
- 6) このような民間歌謡の現代的な大衆音楽化現象については、阿布都西庫爾・阿不都熱合曼の研究（2008）を参照。他方、近年、生活様式の急激な変化にともない、地域社会レベルにおいて伝統的な民間歌謡が失われつつあるという調査報告もある（王 2015）。
- 7) 本書におけるウイグル民間歌謡の提示のしかたは、少数民族の歌謡を記譜する際に採用された独特な楽譜に、漢語の歌詞を乗せる形をとっている。歌謡によっては、ウイグル語の歌詞がローマ字表記で併記されているものもある。
- 8) 1943年にアトウシュで発生した事件として、年寄った男性との結婚を強いられた若い女性のカムバルニサが泉に身を投げて死んだという逸話によっている（Uchqunjan Ömer 1981: 114-115）。強制的な結婚によって若い女性が犠牲になるという逸話は、民間歌謡をはじめとするウイグル文学でよく見られるモチーフである（Brophy 2005）。
- 9) たとえば、カシュガル地区の「歌唱毛沢東」（365頁）、カシュガル市の「喀什姑娘（二）」（391-392頁）、カシュガル地区の「感謝毛沢東」（406頁）などが挙げられる。
- 10) 礼拝の方向を示す、モスクの内部の壁龕。
- 11) 清朝の皇帝を指すと思われる。
- 12) ムスリム反乱鎮圧のために派遣された清朝軍を指す。
- 13) ヤークーブ・ベグの死因については、配下のウイグル族有力者ニヤーズ・ベグによる毒殺、脳卒中など諸説あり、現代の研究者の間では卒中説が有力である。この歌謡においては、文脈からすると服毒自殺したように受け取れる表現がされている。清朝側の史料ではおしなべて服毒自殺とされている。死因に関する諸説については、Hamada 1982: 83-84 を参照。

- 14) コルラで死んだヤークーブ・ベグの遺骸は息子のハック・クリ・ベグによって西方に運ばれる途中、ベグ・クリ・ベグによって奪われてカシュガルまで移送され、アーファーク・ホージャの墓廟に葬られたとされる。清朝軍がカシュガルに進駐した際、その遺骸が清朝軍によって焼かれたと言われており、そのことを指している可能性もある。
- 15) これは事実在即していない。実際は、当時コーカンド・ハン国の実権を掌握していたアールム・クルの命により派遣された (Kim 2004: 83)。
- 16) 中華民国期・人民共和國期の新疆で活動したタタール人の政治家。民国期最後の新疆省政府主席、人民共和國期には最初の新疆省人民政府主席や、中国イスラーム教協会主席などを歴任した。
- 17) 歴史上、カシュガルのまちとして、もともとのウイグル族住民が居住する都市（回城・旧城）と、清朝時代に軍隊・官僚が駐在するために建設された「新城」が存在した。
- 18) 当時カシュガルに滞在していたナザロフの著作には、馬提台に娘を差し出すよう命じられ、抵抗した一家が惨殺された逸話など、具体的な事例が記されている (Nazaroff 1935: 76-78; ナザロフ 1943: 128-133)。
- 19) 初代に新疆ウイグル自治区主席、中国共産党新疆ウイグル自治区委員会書記、などを歴任した。セイビディンの履歴については熊倉潤の研究を参照 (熊倉 2020: 39 (横書頁))。
- 20) 1910年代、第一次世界対戦の後、中央アジア地域から新疆に輸入されていた鉄、茶、織物など人々に必要な工業製品が断られたという条件下で、民族工業の勃興を志したという (Uchqunjan Ömer 1981: 93-94)。
- 21) 提台の馬福興が処刑されて以後、カシュガル地域の行政を任された道台の馬紹武を指すとされる。
- 22) ナフシャの歌詞とコシャックは、イリの民間歌謡に見られるように、重複するものが多い (新免 2021: 231-232)。
- 23) 「我がタシュ・アホン」を意味する。「-(u)m」をつけると「私の～」という意味になる。
- 24) 原文 tash. けちを意味するが、タシュ・アホンの名前とかけていると思われる。
- 25) 満洲語で「大臣」を意味し、清朝時代ならば主要都市に駐在する領隊大臣・弁事大臣を指すが、中華民国時代の場合、おそらくは道台など新疆省地方官僚を意味すると思われる。「アンパンとともに」という文言は、マッチ工場の設置・運営をカシュガルの地方政府と共同で行ったという事実 (Uchqunjan Ömer 1981: 93) と対応するものと思われる。
- 26) この墓廟については濱田正美の研究 (濱田 1991) を参照。
- 27) ウイグル族社会における近代的な教育の勃興と展開の様相については、アブドゥッラ・タリプの研究 (Abdulla Talip 1987) が有名である。
- 28) この人物の活動については大石真一郎の研究 (大石 1996) を参照。
- 29) ミール・アフマド・シャイフと息子のマフムード・ハーンについては、濱田正美の研究を参照されたい (濱田 1991: 103-105)。
- 30) ただし、この点については、これらの歌謡がパントウソフなど外国の研究者側によって指定されたテーマに即して民間歌謡の歌い手に依頼され、創作された、あるいは既存の歌謡が何らかの形でアレンジされたものが記録された可能性も否定できない。
- 31) コーカンド・ハン国はロシア帝国による征服事業の対象となり、1865年のタシュケント占領などを経ていったん保護国となったが、その後1876年に反乱を契機としてロシアに併合された。
- 32) ロシア革命後にカシュガルに滞在したナザロフは、その著作の中で、若い頃にタシュケントで、綿花商人に身をやつしていたベグ・クリ・ベグに遭遇した経験を記している (Nazaroff

1935：71；ナザロフ 1943：118-119).

- 33) 清朝時代末期に著された歴史書、たとえば前述の『ターリーヒ・ハミーディー』などにおいて、「ヒタイ」は漢人を中心に、満洲人なども含む異教徒を指す語として用いられている (Klimeš 2015: 44-46).
- 34) 一般に男性の若者を意味するが、騎兵を指している可能性もある。
- 35) アク・クリ・ベグはおそらくハック・クリ・ベグを指し、ベグ・クリ・ベグの弟に当たる。ヤークーブ・ベグによりトルファン盆地防衛を委ねられたが、清朝軍と戦うことなく撤退したという。ヤークーブ・ベグの死後、父のヤークーブ・ベグの遺体をもってカシュガルに向かう途中で、ベグ・クリ・ベグにより殺害された (kim 2004: 173).
- 36) ヤークーブ・ベグが毒殺されたという現地の史料によると、ヤークーブ・ベグが飲み物を所望した際に、そこに毒を入れられたとされる (Mulla Musa 1988: 489-490)。その際の光景を描いている可能性がある。
- 37) ヤークーブ・ベグの死後、コーカンド・ハン国人 (= アンディジャン人 / アンジャン人) を中心とするヤークーブ・ベグ政権側が清朝軍に有効な対抗の手立てを見いだせず、敗北して逃走したことを示している。
- 38) ヤークーブ・ベグが自らに用いた称号の一つ。
- 39) 陝西における回民反乱の指導者で、清朝による鎮圧に際して新疆のヤークーブ・ベグのもとに逃れた。ダーフー、シューフーは大虎と小虎であり、それぞれ白彦虎、余小虎に当たる。清朝の新疆回復に当たり、ロシア領中央アジアに移動した回民の集団は、その後のロシア領・ソ連領におけるドンガン人につながる。
- 40) このように、異なる機会・主体により収集・記録された、同じテーマ性をもつ歌謡の間で、具体的な詩句が全体としては異なりながらも、場合により部分的に同一の詩句が織り込まれているという例は、イリ地域の歌謡など、他にも見られる現象である。同じテーマ性に沿いながら、様々なヴァリエーションが生み出され、それがさらに時代を経て変化しながら継承されていく民間歌謡の特徴と言えるだろう。

参考文献

〔日本語文献〕

- 阿布都西庫爾・阿不都熱合曼 (2008) 「ウイグル社会における音楽の近代化、人々の音楽に対する意識と行動に関する研究」『人間社会環境研究』15号, 1-17頁。
- 大石真一郎 (1996) 「カシュガルにおけるジャディード運動—ムサー・バヨフ家と新方式教育—」『東洋学報』78巻1号, 1-26頁。
- 小笠原玲子, 小笠原武夫 (2011) 『シルクロードの恋歌：王洛賓の生涯』文芸社。
- 河野敦史 (2013) 「18～19世紀における回部王公とバク制に関する一考察—ハーキム・バク職への任用を中心に—」『日本中央アジア学会報』9号, 15-44頁。
- 熊倉潤 (2020) 『民族自決と民族団結：ソ連と中国の民族エリート』東京大学出版会。
- 新免康 (1987) 「ヤークーブ・ベグ政権の性格に関する一考察」『史学雑誌』96巻4号, 1-42頁。
- 新免康 (2003) 「中華人民共和国期における新疆への漢族の移住とウイグル人の文化」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在』風響社, 479-533頁。
- 新免康 (2021) 「中国新疆のイリ地域におけるウイグル族の「歴史歌謡」について」新免康編『ユーラシアにおける移動・交流と社会・文化変容』(政策文化総合研究所研究叢書30) 中央大学出版部, 207-310頁。

- ナザロフ, P. S. (1943) (齋藤大助訳)『新疆省から印度へ』大和書店.
- 白松強 (2015)「世界無形文化遺産時代における中国の無形文化遺産保護に関する一考察」『年報 非文字資料研究』11号, 73-96頁.
- 濱田正美 (1991)「サトク・ボグラ・ハンの墓廟をめぐる」『西南アジア研究』34号, 89-112頁.
〔現代ウイグル語文献〕
- Abdukerim Raxman (1983), *Xelq Eghiz Edibiyati Nezirisi*, 1-2, Ürümchi: Shinjiang Uniwersiteti edibiyat fakulteti.
- Abdukerim Rehman (2012), *Qeshqer Xelq Eghiz Edebiyati*, Qeshqer Mejmu'esi (23), Qeshqer: Qeshqer Uyghur neshriyati.
- Abdulla Talip (1987), *Uyghur Ma'arifi Tarixi Öcërklar*, Ürümchi: Shinjang xelq neshriyati.
- Ablet Abdulla (tekstni relep, notigha alghuchi) (2007), *Qeshqer Xelq Naxshiliri*, 1, Qeshqer: Qeshqer Uyghur neshriyati.
- Mehemmetjan Sadiq (1995), *Uyghur Xelq Eghiz Edebiyati Heqqide*, Ürümchi: Shinjang xelq neshriyati.
- Mehemmet Zunun, Abdukërim Raxman (1982), *Uyghur Xelq Eghiz Edebiyatining Asasliri*, Ürümchi: Shinjang xelq neshriyati.
- Molla Musa Sayrami (1988), *Tarixi Hemidi*, Neshrge teyyarlighchi: Enwer Baytur, Bëyjing: Milletler neshriyati.
- Seypidin Ezizi (1997), *Ömür Dastani, Eslime 1: Zulum Zindanida*, Bëyjing: Milletler neshriyati.
- Uchqunjan Ömer (1981), *Uyghur Xelq Tarixi Qoshaqliri*, Qeshqer: Qeshqer Uyghur neshriyati.
- Uyghur Xelq Naxshiliri*, (3) (1983), Sözini retliguchi: Muhemmet Zunun, Muzikisini notigha alghuchi: Emetjan Exmidi, Ürümchi: Shinjang xelq neshriyati.
- Zumret Ghappar (2012), *Uyghur Xelq Qoshaqliri Haqqide Tetqiqat*, Bëyjing: Milletler neshriyati.
〔漢語文献〕
- 包爾漢 (1958)「論阿古柏政權」『歷史研究』1958年第3期, 1-7頁.
- 王成文 (2015)「喀什民歌生存現狀」『新疆芸術学院學報』第13卷第3期, 27-32頁.
- 王海成, 言行一 (2013)『歌者王洛賓』烏魯木齊: 新疆美術攝影出版社.
- 周吉 (1982)『維吾爾族民歌研究』烏魯木齊: 中国音楽家協会新疆分会.
- 《中国民間歌曲集成》全国編輯委員会《中国民間歌曲集成・新疆卷》編輯委員会 (1999)『中国民間歌曲集成・新疆卷』上冊, 北京: 中国 ISBN 中心.
- 〔ヨーロッパ諸言語・ロシア語文献〕
- Brophy, David (2005), "Forced Marriages and Female Heroines in Uyghur Culture," *Harvard Asia Quarterly*, IX/1-2, pp. 57-65.
- Dutreuil de Rhins, J. L. (1898), *Mission Scientifique dans la Haute Asie, 1890-1895*, Troisieme Partie: Histoire - Linguistique - Archelogie - Geographie par F. Grenard, Paris: Ernest Leroux, Editeur.
- Forbes, Andrew D. W. (1986), *Warlords and Muslims in Chinese Central Asia: A Political History of Republican Sinkiang 1911-1949*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hamada, Masami (1982), "L'Histoire de *Hotan* de Muhammad A'lam (III)," *ZINBUN*, 18, pp. 65-93.
- Harris, Rachel (2005), "Wang Luobin: Folk Song King of the Northwest or Song Thief? Copyright, Representation, and Chinese Folk Songs," *Modern China*, Vol. 31, No. 3, pp. 381-408.
- Kim, Hodong (2004), *Holy War in China: The Muslim Rebellion and State in Chinese Central Asia, 1864-1877*, Stanford: Stanford University Press.
- Klimeš, Ondřej (2015), *Struggle by the Pen: The Uyghur Discourse of Nation and National Interest, c.*

1900-1949, Leiden: Brill.

Le Coq, Albert von (1928), *Buried Treasures of Chinese Turkestan*, London: George Allen & Unwin Limited.

Nazaroff, P. S. (1935), *Moved on! From Kashgar to Kashmir*, London: George Allen & Unwin Ltd.

Pantusov, N. N. (1901) *Materialy k Izucheniiu Narechiia Taranchei Iliiskago Okruga*, Vypusk shestoi: Stikhotvoreniia o Iakub-bek, Gosudar Kashgarii, i o Sovytiakh Ego Vremeni (Taranchinskii Tekst' Russkaia Transkriptsiia, Noty i Russkii Perevod), Kazan': Tipolitografiia Imperatorskago Universiteta.

